

坂茂 建築家

紙を素材にアイデアを凝らし 避難所、仮設住宅に「快適さ」を

世界を舞台に活躍する建築家であると同時に、トルコ、インド、スリランカ、ハイチなど各国の被災地で住宅や学校を建て、支援を続ける「行動する建築家」、坂茂さん。避難所にプライバシーを確保する「間仕切り」を。仮設住宅に「美しさ」と「快適さ」を。不可能とも思える挑戦を支え、突き動かしてきた思いとは。

難民シエルターから被災者支援へ

紙を素材にした優美な建築物を設計し、世界的な評価を受ける建築家・坂茂さん。フランスの国立美術文化センター「ポンピドゥー・センター・メス」といった国家的



仮設住宅建設の後、紙管を使って建てた神戸たかとり「紙の教会」
©Hiroyuki Hirai



紙管をシートの支柱に使った、ルワンダ難民キャンプの仮設シェルター（UNHCR）
©Shigeru Ban Architects

プロジェクトを手がける一方、世界各地で起きた自然災害現場へいち早く駆けつけ、ボランティアで仮設住宅や学校を建設するなど「行動する建築家」としても知られる。「僕が学生時代に建築家を目指したのは、『人の役に立つ仕事ができる』と思ったから。しかし実際になってみると、建築家の仕事は多くはお金持ちなど特権階級の人達のためのものでした」建築家としての自分の知識と経験を、住む場所に困っている人たちに役立てられないか。そう考えていた94年、坂さんは雨期のアフリカで毛布にくるまり震えているルワンダ難民の写真を見て、あることをひらめく。「僕が86年から素材として使っていた再生紙の紙管は、現地調達がいやしく、コストが安く加工も簡単。リサイクルも可能です。強度は木に劣るものの、構造を工夫すれば丈夫な建築物ができるのです」



Shigeru Ban

1957年東京都生まれ。80年、ニューヨークのクーパー・ユニオン建築学部入学。途中1年間休学して磯崎新氏の事務所に在籍。85年、坂茂建築設計を設立。2000年ドイツハノーバ万博日本館を「紙の建築」で手がける。1995～2000年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタント。2010年よりハーバード大学、コーネル大学客員教授。2012年、文化庁文部科学大臣賞受賞。ニュージーランド、クライストチャーチ仮設大聖堂が今年秋完成予定。

紙を使った間仕切りで避難所にプライバシーを

同じ年、日本は阪神・淡路大震災に襲われた。坂さんは紙管を素材に神戸市内の教会に集まった元ベトナム難民に向けた仮設住宅や、教会のコミュニティホールの再建を手がける。

ボランティアとして被災地へ通うなかで、避難所や仮設住宅の抱える問題点にも気づいたという。「被災して家族を失い、精神的なダメージを受けている方々にとって、住み心地のいい空間を提供することは非常に重要です。しかし今までは『住む場所を用意する』ことが先決と考えられ、生活のクオリティは後回しだったと思う」その後、04年の中越地震、05年の福岡県西方沖地震で実際に避難所の支援を始めた。プライバシーを保つために用意した紙の間仕切り

りに対して、「人数の管理が難しくなる」と導入を渋られたことも。「避難している人も、『お世話になっている身だから』と、文句やわがままを飲み込んでしまう。だからこそ僕のような人間が声をあげ、行政と利用者との間に立つて最善の方法を考えなければと思いましたが」

例えば、中越地震の避難所に用意した家のような形の間仕切りは、閉鎖性は高いが家族の人数にフレキシブルに対応できなかった。間仕切りが高く、避難所である体育館の舞台上に設置されたテレビが見えない、という声もあった。そうした点を改良した福岡の間仕切りは、組み立ては簡単になったものの、プライバシーが保てないという問題が起きた。「そうした過去の経験を元に出来たのが、紙管で柱と梁を組み立てカーテンを張ったシステムです。

坂さんが建築設計を手がけた女川町の仮設住宅。その住練間につくられた「紙のアトリエ」は、ボランティアによる各種教室や、遊び場として開放している
©Hiroyuki Hirai

建築は、希望。 人の役に立つ仕事に 関わる喜びを感じます。



女川町の仮設住宅全景。仮設住宅としての役割を終えた後は、運動場併設の合宿所に転用予定だ

©Hiroyuki Hirai

ティアが作り付けの家具を製作。ちゃぶ台としてもテーブルとしても使えるように、脚の長さが変えられる食卓も用意した。

「戦後、日本人の住まいの質は大きく向上しました。災害に遭う前の暮らしの質を実現するのは難しいにしても、それ相応に、暮らしやすく快適で、しかも美しい住まいであることが大切だと思います」

物と物に挟まれて小さくなっていくような家では、心身の疲れを癒すことは難しい。快適な住まいは、復興に向かう明日への活力に

「間仕切りシステムは、使いやすさでもコスト面でも今回のシステムが最上だと考えています。コンテナを使った多層の仮設住宅も、日本という国土を考えたら、これがベストの形でしょう。もし今後また大きな災害が起きたときは、こうした『前例』をもとに、よりよい住まいを提供していつて欲しいと願っています」

建築家としての活動では、2011年にニュージージラント

南部地震で被災したクライストチャーチの仮設教会が間もなく完成する。

「町の中心部では90%以上の建物が建て替えを余儀なくされ、景観が失われていくことを人々は悲しんでいます。そこに仮設とはいえないモニュメンタルな建物が生まれるのは、『大きな希望だ』と僕に語ってくれた人がいました」

建築は希望。大きな災害に遭っても、人はまた建物を、そして暮らしをつくり上げることができる。被災地での建築に関われる満足感や喜びは、世界的な建築をつくる満足度と、「まったく境目がありませんね」と語る坂さん。「行動する建築家」としての活動は、ますます多様に広がっていきそうだ。



3号棟の外観。パステルカラーで「テーマパークのホテルみたい」と住民たちにも好評だ

©Voluntary Architects Network



©Voluntary Architects Network



©Voluntary Architects Network

右上／東日本大震災で避難所となった岩手県大槌町の体育館。間仕切りが設置される前の状況
左上／間仕切りが設置された状態。改良を重ね、組立式で設置も容易に。夏にはカーテンを蚊帳に替え、被災地で発生したハ工対策に大きな効果を上げた
左／2005年、福岡西方沖地震の際、活用された避難所用間仕切りシステム。この頃はまだ紙のついでだった



©Voluntary Architects Network

組み立てるのも簡単で、開閉ができ、紙管の長さを変えればサイズも変えられる。これを、06年の藤沢市防災の日に合わせて開発したのです」

そして2011年3月11日。パリの事務所東日本大震災を知った坂さんは、すぐさま避難所の間仕切りプロジェクトをスタートする。慶應義塾大学で教えていた時の研究室OBを集め、事務所のサイトを通じて義援金を募った。

「自治体の援助を受けるには、許可がいるとか議会を通すなど、時間がかかりすぎる。その間にも困っている人たちはいるのですから」

間仕切りシステムはさらに改良を重ね、サイズの違う2種類の紙

管の太い管の穴に細い管を差し込むことで、コストの低減と、組み立てやすさを実現した。

「サンプルを持って避難所をまわり、実際に避難している人の前でデモンストラーションをしながら『この避難所でも作らせてください』とお願ひして回りました」

コンテナを積み上げた 美しく快適な仮設住宅

そして今回、坂さんが手掛けた宮城県女川町の仮設住宅。その設計・建築には、次のようないきさつがある。

震災直後の報道から、坂さんは多くの被災地やその周辺地域に、仮設住宅を建てるために十分な平地が少ないことに気づいていた。

「つまり従来の平屋ではなく、多層の仮設住宅が必要になるはずだ。そこで前々から温めていた海上輸送用のコンテナを使った3階建て仮設住宅を、避難所支援で知り合った女川町の安住伸孝町長(当時)に提案したのでです」

コンテナを市松模様に積み上げ、コンテナ同士の間のオープンな空間に全面ガラスを入れて開放的なリビングを作る。コンテナ内部はやや閉鎖的なため、子供部屋やバ

ス・トイレに利用する。

「コンテナの数は従来の半分程度で済む上、屋根との間に隙間をつくることで風通しを良くして夏も涼しい住宅ができます」

構造としては耐火性能、断熱性能、遮音性能も十分に備えている。ただ県の予算を使う関係から、室内の面積は一般的な平屋の仮設住宅に揃える必要があったという。

「これまで見てきた多くの仮設住宅では、十分な収納がないために、家中にモノや衣服があふれていた。間に合わせの家具を入れたために室内が狭くなりがちでした」

そうした不便を少しでも解消してもらおうと、義援金を元にボラン

明るく広々とした室内。上部の作り付け家具の下にはハンガーがかけられ、衣類が収納できるなど細かな工夫も

©Hiroyuki Hirai

